

## 新たな 連携へ

## 他制度産学官連携人材との協働

# 地域内大学、行政との産学官連携

キーワード：医工農連携・大学連合・産学官連携人材

### 本事例の関係者

群馬大学  
前橋工科大学  
首都圏北部4大学連合  
群馬大学共同研究イノベーションセンター  
文部科学省産学官連携  
コーディネーター

## 他機関とのコラボレーションによる産学官連携

### 【要約】

本学は“首都圏北部4大学連合（茨城大学、宇都宮大学、群馬大学、埼玉大学以下「4u」と略称）”の一員として地域振興策を進めている。今回、4uと前橋工科大学による「イノベーション創出による地域活性化に向けた医工農連携シンポジウム」を開催した。コーディネーターは、このシンポジウムの企画・立案において前橋工科大学、群馬県産業政策課の担当者と協働し、後援機関等の協力の下にシンポジウムを開催することができた。会場に企業・医療・教育・行政等の100名余の参加者をむかえることができた。企画当初の目的である関係機関との連携協力の輪を広げることができ、シンポジウムは大成功であった。

### 【きっかけ】

医学・工学が連携して課題を解決するという仕組みは、社会ニーズの強い、期待の高いシステムではあるが、現状はそれほど十分な広がりを見せているようには感じられない。

しかし、本学には医学部（医学系大学院・保健学科）・附属病院・生体調節研究所・工学系大学院の多部門を擁しており、異分野の研究者や企業と協働した医工連携を推進するリーダーシップが求められている。そこで、コーディネーターは、本学が群馬県と進める事業及び前橋工科大学と進める事業をコラボレートし、生涯健康で安心・安全な街づくりをコンセプトに、4uを加えた医工農連携シンポジウム開催に着手した。

### 【段取り・プロセス】

平成20年12月に前橋工科大学、群馬県の担当者と3人で企画を進め、大学が保有する医工農に係わる研究発表と企業のニーズをマッチングすることにより、地域イノベーションの創出と地域産業の振興を図ることを目的としたシンポジウムを立案した。

企業関係者に開催を知らしめるために、開催案内を1,500部配布して関係者への周知を図った。担当者それぞれが作業を協力・分担したことで、2月中旬の開催に間に合わせることができた。

### 【成果・結果や活動後の変化】

年度末を控え多忙な時期であったが、地域内大学関係者及び他制度産学官連携人材との連携協力により当該シンポジウムを開催することができた。

開催日には100名を超える参加者があり、群馬TV及び地元新聞社の取材を受けるなど、シンポジウムは大いに盛り上がった。シンポジウム終了後の名刺交換会では、自治体・金融機関・NPO法人・大学等の他制度産学官連携人材、及び地域内大学等の関係者それぞれが、自己のネットワークを拡大することができた。



医工農連携  
シンポジウム

### シンポジウム

- 参加者：百余名
- マスコミ取材
- ・群馬TV放映  
(H21年2月18日)
- ・地元新聞掲載  
(2月19日の朝刊)

イノベーション創出による地域活性化に向けた  
**医工農連携シンポジウム**

主催：首都圏北部4大学連合  
・茨城大学  
・宇都宮大学  
・群馬大学  
・埼玉大学  
前橋工科大学

生涯健康で安全・安心な生活を実現する社会の実現に向け、地域と大学が連携し、地域の活性化、産業の振興に寄与することを目的として、今回「医工農連携シンポジウム」を共同で開催します。

**日時** 平成21年2月18日(水) 13:00～18:00  
**開催場所** 前橋工科大学 1号館5階 151教室  
〒371-0816 群馬県上野村町460-1 TEL:027-265-0111

**対象** 医・工・農に携わる企業及び関係団体等関係者  
**参加費** シンポジウム 無料  
交流会 1000円

**プログラム**

13時～14時10分 開催挨拶 前橋工科大学 江守克彦 学長  
第1部 基調講演  
テーマ 「産業メンタルヘルスを巡る諸問題」  
講演者 群馬大学大学院 医学系研究科 脳神経発達神経学講座 神経精神医学分野 三國 博孝 教授

14時10分～17時 第2部 パネルディスカッション  
テーマ 「医工農連携によるイノベーション創出と地域の活性化」  
MC 司 群馬大学共同研究イノベーションセンター 藤原 亮 教授  
MC 2 前橋工科大学システム生体工学科 寺村 一之 教授  
MC 3 茨城大学農学部生物生産科学科 駒丸洋吉 教授  
MC 4 群馬大学大学院イノベーション教育研究センター長 藤原 亮 教授  
MC 5 埼玉大学工学部材料科学コース機能材料工学コース 高野 浩一 教授  
MC 6 群馬大学工学部保健福祉学専攻理学療法専攻総合理学療法学 渡川 昌彦 准教授  
MC 7 (アダプティブ) 株式会社 立石 正一 取締役

17時～18時 交流会

図1 医工農連携シンポジウム

## 成功の事例

# 「著名教授」の講演を入れた2部構成とする

### ●基調講演に著名な講演者をむかえ、2部構成として参加者動員をはかる！

コーディネーターは、このようなシンポジウムが、講演者からの一方通行の講演会になりがちで、これが会場の盛上りを欠く大きな要因であり、何故改善できないのか常々疑問に思っていた。また、イベントを開催する場合、主催者泣かせなことは、動員する参加者の数の把握である。

このため、シンポジウムを2部構成とした。

第1部を著名教授による「産業メンタルヘルスをめぐる諸問題」と題する基調講演とし、第2部を4uの医学・工学・農学研究者によるパネル討論会とした。基調講演は、教育・医療・産業保健等の関係者の集客を果たし、パネル討論会ではパネリスト間及び会場の参加者とパネリスト間で議論を深めた双方向対話を実現でき、活況のシンポジウムを実現できた。



図 2 三國教授の講演

## 失敗の事例

# 一方通行の講演会は参加者動員をはかれない

### ●プログラムに工夫のない講演会は参加者動員をはかることができない

講演会には失敗がつきものである。その失敗の要因は；

①講演会のプログラムに魅力がないこと。②研究者・学者の講演が主体であること。③講演者から参加者への一方通行の講演であること、等である。

これら为了避免するためには、講演会のプログラムに魅力を持たせ、参加者の動員を図ることである。プログラムが講演会と参加者を繋ぐ唯一の“パイプ”であることを認識し、パイプとなるプログラムに参加意欲をそそる工夫が求められる。

また、講演者に企業を迎えることである。講演会に参加する企業は、新規の技術開発や新規事業への参入を考えており、それを実現する際の障壁が極めて高く容易に乗越えることができない観念がある。参加企業はそのブレークスルーを講演会や企業講演者に求めていることを理解しなければならない。

次に、講演者から参加者への一方通行の講演は、会場の盛上りを欠くことを認識すべきである。このため、講演者と会場の参加者との間にFace to Faceで対話のできる「場」を設定する必要があることを認識すべきである。

## 産学官連携の新たな展開に向けた提言

# コーディネーターが医工連携の壁に挑戦する

医療・福祉の充実した社会に向けて、医学と工学が連携してイノベーション創出に挑戦することは、少子高齢化社会における社会的要請のトップレベルに位置付けられている。

しかし、現状の連携は十分な広がりを見せておらず、イノベーション創出に当ってはまさに手探り状態である。この現状を打破するために、コーディネーターは4uと共に以下の活動を進め、医工連携の壁に挑戦する。

- ①医工連携研究会の開催エリアの拡大  
・4u活動によりネットワークを拡大し、農学を含めた食品・環境課題に取り組む。
- ②医工連携研究会の首都圏での開催  
・首都圏展開は全国展開の第一歩である。首都圏及び全国の他制度産学官連携人材と協力して技術力・資源の豊富な企業との連携をはかる。
- ③県の健康科学産業振興のため、医工連携研究会を継続開催し地域振興をはかる。

## 新たなる 連携へ

要旨	
第1部 基調講演	三國 智彦 教授 産学連携推進センター長 題目 産業メンタルヘルスを巡る諸問題 要旨 産業メンタルヘルスの重要性が認識され、企業・社会ともに注目を集めている。本講演では、産業メンタルヘルスの現状と課題、そして産学連携による取り組みについて紹介する。
第2部 パネルディスカッション	コーディネーター 須藤 実 教授 経済学部長 パネリスト 今村 一之 教授 産学連携推進センター長 西垣 功一 教授 産学連携推進センター長 原秋 知英 教授 産学連携推進センター長 遠川 康浩 准教授 産学連携推進センター長 野立 正一 准教授 産学連携推進センター長

### 医工農連携シンポジウムの講演要旨

## 成功と失敗の 分かれ道

プログラムが講演会と参加者を繋ぐ唯一の“パイプ”である。プログラムに魅力を持たせ、参加者の動員を図ることが講演会成功へのアプローチである。

### ☆コーディネーターの一言

現状の医工連携は十分な広がりを見せてはならず、イノベーション創出に当って手探り状態にある。この現状を打破するために、コーディネーターは産学官をあげて、医工連携の壁に挑戦する。